



Title	懷徳堂と自然科学
Author(s)	伴, 忠康
Citation	懷徳. 1988, 57, p. 5-10
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90692
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂と自然科学

適塾記念会理事

伴 忠 康



オランダのデ・リーフデ号（慈愛号）が、やっとのことで別府湾にたどりついたのは、一六〇〇年四月十九日のことである。オランダ東印度会社が平戸に定着したのが慶長十四年（一六〇九）であるから、昭和六十四年が丁度三八〇周年に当る。そこで、日蘭文化交流三八〇周年を記念して、その記念事業を行いたいということを聞いた。現在特に努力しているのは堺市で、大阪もこれに協力するらしい。

長崎から帰坂した緒方洪庵が瓦町で適塾を開いたのが天保九年（一八三八）、ついで過書町に移転したのが天保十四年（一八四三）。これには弘化二年（一八四五）という説もあるが、懷徳堂の開学（享保九年、一七二四）から考えると、百年以上もあとのことになる。漢学塾の懷徳堂は蘭学塾の適塾から西南方百米位の近隣にあったので、私は両塾相互間に何等かの影響があったものと考え、常にかこの点に注意をはらってきた。

適々斎、適々、適塾が莊子の『大宗師』から引用されたように、適塾生は蘭学の修業をするが、基盤には漢和学があったということは言うまでもない。塾生であった長与専斎は、『松香私志』という日記帳を書いた。日本に「医制」を創設したが、莊子の『庚桑楚篇』にある老子の「衛生の経」から

引用して、「衛生学」という名称を作った。「神経」という名称は、杉田玄白らが創作したものである。漢書から引用したものではないが、漢学が基盤になっているのは申すまでもない。

大阪大学医学部の部長室にある机の上には、三浦梅園が右手を天球儀にのせたブロンズ像（秀雄作）がある。私が国東半島富永村にある梅園（一七二三—一七八九）の家を訪れたのは、少くとも三十年も前のことであるが、梅園が蘭学によって、生涯天地の真理を考究し、天文暦学、経済学、哲学の大家といわれ、また顕微鏡も利用していた学者であることを知り、敬意を表したことであった。

梅園の門下生ともいわれた麻田剛立（一七三四—一七九九）は杵築藩の医師であったが、明和八年（一七七二）に脱藩して大坂に来た。中井履軒の世話によって本町四丁目に家を持ち、ここで開業をしたが、同時にここで天文暦学や解剖学などを研究した。履軒は麻田剛立や梅園とも親交があったのである。

麻田剛立の先事館塾では、天文暦学や解剖学が教えられたが、門下生には、優秀な町人が多くいた。その中には、高橋至時、間重富、山片重芳、山片蟠桃、西村太沖などが挙げられるが、山片蟠桃やその主人の山片重芳のように中井竹山や履軒の門下生である人々もいたのである。

高橋至時の次男である渋川景佑は『ラランデ暦書』を完成して『新巧暦書』とし、天保暦の基礎を作っている。至時の門下生である伊能忠敬は蝦夷の地図を作り、間宮林蔵に千島で測量術を教えた人である。

中井履軒は常に剛立の解剖に参加して、解剖書『越俎弄筆』（安永二年・一七七三）を刊行した。漢学塾の懷徳堂の教師が立派な解剖書を著わしたのである。

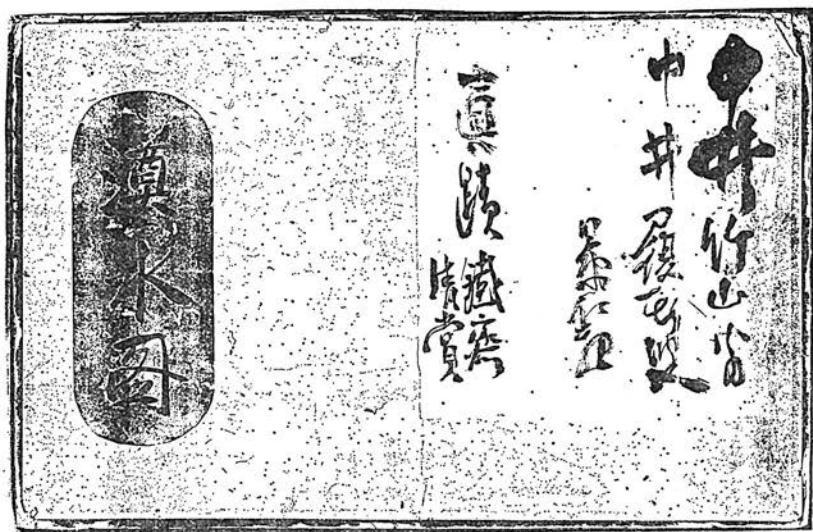
京都の山脇東洋の著書『蔵志』（一七五九）は、日本では最初の解剖書である。これには内臓や血

管などの記載が不足していたので、履軒の本にはこれらが特に重視されて、門脈まで図示されている。この本の色彩図は履軒が画家であったといってもよいほどに立派なものである。蘭書を訳した杉田玄白らの『解体新書』は安永三年に刊行されたので、『越俎弄筆』はこれより一年も早く刊行されたことになる。

履軒は、また、木村兼葭堂所有の顕微鏡の模作品を覗いて驚嘆。感激して書いたといわれる『顕微鏡記』（一七八一）は、日本で初めての顕微鏡に関する文献である。但し付図はない。付図をつけた記録は、平賀源内の弟子・森島中良の『紅毛雑話』（一七八七）で、図は司馬江漢が描いているが、履軒と何等かの関係があったようである。

蘭医エルメレンスは明治三年に大坂医学校教師になったが、日本で最初に顕微鏡の講義をしている。この「視官論」は、彼の『生理新論』（明治六年）の中に記されているが、顕微鏡と大坂とは、履軒以来、極めて密接な関係にあったと申してもよい。

富岡鉄斎（一八三六—一九二五）は、中井竹山画像を模写したほどに、懷徳堂に私淑していたようである。淀川舟遊を行なった履軒や竹山らの漢詩や和歌、スケッチ画などを一冊にまとめた『漢水図』（二三×三五・五センチ）の表紙にも、鉄斎が清賞した彼の字句が貼られている。潑水をこよなく愛した竹山、履軒幽人、春楼（三宅石庵の子）、景範（小川喜太郎）、高敬、子 and らの漢詩、和歌など（画は省略）の一部を転載して、『漢水図』を紹介し、稿を終ることに致します。



天馬橋頭人
 絡繹天馬橋
 下舟縱橫兩
 岸微茫秋霧
 合半天擎出
 浪華城
 竹山

鼓岸上鼓敲
破篷底睡借問
大呌處過得鳩
峯未

履軒出人題

黑雲移過漢川
舟未解纜維白
面底那村可忘
光極苦夕陽滿
目如秋

老梅

景乾

下海山

水谷山

水谷山

水谷山

水谷山

(兵庫医科大学前学長・大阪大学名誉教授)